

【論文】

農山村地域における I ターン移住と地域社会との接合について
——徳島県上勝町での聞き取り調査から——木 村 自[†]

1. はじめに

1980 年代後半以降、首都圏等大都市から地方や農山村への移住が増加している。いわゆる I ターンである。1980 年代から 90 年代にかけては、定年退職者が都市部を離れて農山村地域に移住する「定年帰農」が注目されたのに対して、近年は若者の「田園回帰」意識が高まっているとされる（小田切・尾原 2018）。2014 年には、いわゆる「地方創生法」が制定され、地方の再創造、地方居住人口の増加、地方の就労機会の創出が、地方の活性化の屋台骨とされた。

2017 年に総務省が発表した「『田園回帰』に関する調査報告」は、都市住民が農山村へ I ターン移住を希望する傾向を示している。総務省が、東京都内および政令指定都市に居住する 20～64 歳 3000 人余りに行った調査において、全体の 3 割が、程度の差こそあれ、農山村への移住を希望ないしは夢見ていることが示されている（小田切・尾原 2018: 93）。

こうした地方創生の思想が普及するのに相まって、行政、学術、民間メディアなどの領域においても、様々な地域の取組みが地方活性化のモデルケースとして紹介され、分析されてきた（藻谷 2013; 濱田・伊藤・神戸 2018 など）。地域の取組みはブランディング・イメージとしてパッケージ化され、誰にでも理解可能なマスターナラティブ

としてメディアで流通する。また、行政からの理解と支援を得るためにも、地域の取組みをできるだけパッケージ化し、図式化して見せることは重要なポイントとなる。パッケージ化されたモデルケースは、応用可能で、複製可能な制度や仕組みとして、他の地域においても、学術界においても再生産される。さらに、こうしたブランディング・イメージが I ターン移住者を地域に引き寄せる。

しかし一方で、当然のことであるが、地方創生の成功事例とされる地域に生きる人びとの誰もが、このようにモデル化され、パッケージ化されたブランディング・イメージを体現しているわけではない。むしろ、モデル化され、パッケージ化された成功事例のマスターナラティブは、そうしたマスターナラティブには回収されることもなく、その背後でうずまいている多様な経験や奮闘、困難や闘いを捨象することではじめて成立するのではないか。モデル化され、パッケージ化された地域のブランディング・イメージの背後には、人々の日常の生がどのようにうずまいているのであろうか。

こうした問いに答えるため、本稿は徳島県上勝町に移住した I ターン者を対象に、彼らが町のブランディング・イメージや地域の行政システム、地元共同体とどのような関係をつむぎだしてきたのかを明らかにする。上勝町も地方活性化のモデルケースの一つとして、学術分野やメディアなどで数多く取り上げられてきた。とくに料亭のつまものとして使われる葉っぱビジネスの「いろど

[†] 立教大学社会学部准教授
kimuramizuka@rikkyo.ac.jp

り」事業と、ゴミの排出を極限まで減らす試みである「ゼロ・ウェイスト運動」が注目を集め、上勝町のブランディング・イメージを作り上げている（石川 2015）。

本稿は、こうしたブランディング・イメージが作り上げられた地域における I ターン移住者の移住経験の語りを分析対象に、彼らの期待や展望、困難や奮闘を描き出すことで、成功モデルのマスターナラティブには回収されない多様な生のあり方を提示する。上勝町のブランディング・イメージと対峙し、行政の移住者政策を時に利用し、地域共同体組織と適度に折り合いをつけながら上勝町で暮らす I ターン者の姿が看取できよう。「地域と脱地域を同時に抱え込んだ行為者」（菅 1998: 155）として、I ターン移住者が、地元の共同体や行政の制度・仕組みに自らを接合させながら営む生活を、エスノグラフィックに描きたい。

上勝町の事例に入る前に、まずは I ターン移住者をめぐる社会学的研究の概要を整理し、問いの射程を示しておこう。

2. 問いの射程

都市部を離れ、農山村地域に移住して生活する現象は、60 年代後半のコミュン運動に始まるとされる。この時期、「山奥や離島で自分たちだけの新たな理想郷社会を作るため」（高木 2000: 5）、ヒッピーたちが農山漁村地域に移住した。その後こうしたコムニ運動は収束するものの、田舎での暮らしを求める I ターン移住は、1980 年代以降から徐々に増加し、今日では一定の潮流を形成している。

その間、農山漁村地域へ移住する人々の動機や目的は大きく変容し、移住を支える制度的仕組みや人々の認識も変化した。自然環境や都市部とは異なる新たな生活様式を求める目的に加えて、地域活性化の担い手を積極的に引き受け、地域貢献を目指すことを目的とした人びとも少なくない。本節ではまず、こうした I ターン移住者の動機や

目的の変容を探り、その上で本稿の事例を読み解くための分析軸を示したい。

1990 年に実施された調査にもとづき I ターン現象を分析した菅は、I ターン移住者の移住動機や移住の志向性にもとづき、三つの類型を提示している。アメニティ・ムーバー、環境難民、オルタナティブ・カルチャリストの 3 類型である（菅 1998: 163）。アメニティ・ムーバーとは、大都市部では享受できない生活の快適さ、趣味の充実を求めて、都市部から農山村地域へ移住するものであり、環境難民とは、たとえば都市工業地域の環境汚染による健康被害を回避する目的で、農山村地域へ移住する人々である。また、オルタナティブ・カルチャリストとは、「近代社会を律する文化とは異なる別の文化（alternative culture）」（菅 1998: 163）を探究することが農山村への移住目的であり、先述のコミュン運動の流れを継承すると言えよう。

アメニティ・ムーバー、環境難民、オルタナティブ・カルチャリストはいずれも、地域への貢献や地方の活性化を目指しているのではなく、農山村地域の自然環境に積極的に身を任せながら自律的に生きること心地よさを感じる。いわば I ターン移住者にとっては、新たな風景を発見するための移住である。菅は、この点に地元住民と I ターン移住者との間のトポフォリア（風景に対する愛着や憧憬）のずれを見出す。I ターン移住者と地元住民とのこうしたトポフォリアのずれによって、地元住民は移住者に対するとまどいの感情を喚起されるとともに、I ターン移住者のトポフォリアを通じて地域社会が変革されると説く（菅 1998）。

しかし、こうしたトポフォリアのずれは、1990 年初頭と現在では大きく異なっているのではない。1990 年代後半以降、都市部から農山村地域への移住が国家レベル、民間レベルを問わず推進されている。都市部には地方移住をサポートするセンターが設立され、2014 年には地方創生法が成立し、農山村地域への I ターン移住は、単なる

物好きの享楽ではなく、地方活性化の切り札と考えられるようになった。農山村地域は、過疎化を食い止め、地域の活性化を図るため、生活の不便さや自然の豊かさをも含めて、地域イメージを積極的に作り出そうとしている。また、地域の資源を利用した産業を起し、パッケージ化された地域のブランディング・イメージを伝えようとしている。さらに、Iターンの人材確保競争のなかでよりよい人材を獲得するため、政策や制度など行政的な仕組みの確立にもつとめている。

Iターンをとりまくこうした社会や制度の変化のなか、Iターン移住者は自然環境や趣味といった自らが確立したイメージではなく、農山村地域が努力して作り上げたブランディング・イメージをもとめて移住する。逆に地元の人々も、大挙して押し寄せるIターン移住者にもはやとまどうことはない。

よって、今日のIターン移住者が地域コミュニティといかなる接合を可能とするのかという問いを考察する場合、次の3点が問題となる。第1に、Iターン移住者が、自らが引き寄せられたブランディング・イメージと実際の生活との間でどのように折り合いをつけているのか。第2に、Iターン移住者が農山村地域での生活を確認する上で、補助金などを含む行政上の様々な措置をどのように利用し、どのように価値付けているのか。第3に、Iターン移住者が、地域の日常的なハビトゥスや地元共同体組織にどのように参与し、折り合いをつけているのか。

次節以降は、徳島県上勝町で筆者が行った聞き取り調査にもとづき、上記三つの点について、Iターン移住者がいかに経験し、いかに奮闘しているのかを分析したい。その前に、まずは徳島県上勝町の概要を示しておこう。

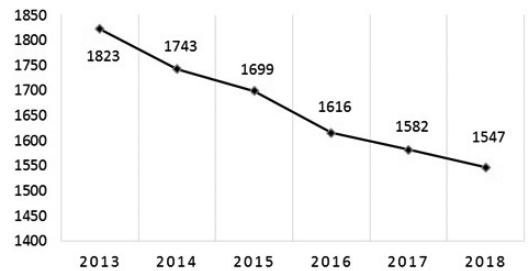
3. 徳島県上勝町の概況

3.1 上勝町における人口推移

本稿が取り上げる上勝町は、徳島県中部の中山

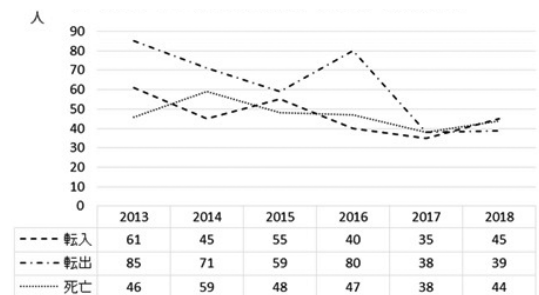
間地域に位置しており、2018年現在の人口は約1,550人である。65歳以上の高齢者人口が総人口の52パーセントを占めており、いわゆる限界集落と呼ぶことができる。ここ数年の総人口も右肩下がりに減少している（グラフ1）。上勝町では、2013年から2018年までの間に、年平均46人の人口減が見られる。

他方で後述のように、上勝町は「株式会社いどり」の葉っぱビジネスや、ゼロ・ウェイストアカデミーなど、先駆的な取組みで全国に名を馳せてもいる。そのため、毎年国内外から多くの視察団が訪問する。また、こうした先駆的な取組みが国内外で有名になったために、全国各地から数多くの若者がこれらの取組みに従事するため、インターンやビジネス従事者として上勝町に移住している。2013年から2018年までの6年間における上勝町への転入人口は年平均47人である（グラ



グラフ1 上勝町人口総計

*上勝町役場の統計をもとに、筆者作成。



グラフ2 上勝町転入・転出人口統計

*上勝町役場の統計をもとに、筆者作成。

フ 2)。

このように一定数の転入人口があるにもかかわらず、それ以上の人口転出がある。2013 年の 85 人を筆頭に、2013 年から 2018 年までの間に、年平均 62 人が上勝町から転出している。もちろんこの統計では、高齢地元住民の転出なども含まれており、転入者人口の純転出人口は不明ではあるものの、転入者が必ずしも上勝町に定着しているわけではないという傾向は看取できよう¹⁾。こうした転出人口に加えて、人口の自然減少までを含めると、上記のような人口減につながっている。

3.2 上勝町における地域活性化と地域ブランド化の構築

上勝町の名を全国に知らしめることとなったのは、料亭などの料理の飾りに使われるつまものを中心とした葉っぱビジネス「いろいろ」事業と、ゴミの分別を中心としたゼロウェイスト運動である（石井 2015）。

上勝町では、1970 年代に林業が衰退し、主要農産物であった柑橘類の樹木が 1980 年代に寒波により打撃を受けるなど、産業の衰退とそれともなう人口流出が進行した。そのため、当時の営農指導員として上勝町農協に勤務していた職員の一人が、町内の主婦 4 人と協力して、町の新たな収入源の一つとして、葉っぱビジネス「いろいろ」を 1986 年に開始した（川床 2013: 121-122）。現在は株式会社化され、町長が代表取締役会長を勤めていることから、町をあげたビジネス展開であることが分かる。

いろいろが注目されるようになったのは、高齢者がパソコンを利用した生産・販売管理を行い、なかには一人で億単位の年商をあげている人があるなど、従来の過疎農山村における孤独で無職の高齢者像を覆したことにある。川床も、上勝町のいろいろ事業によって、高齢者・情報テクノロジー・もの（葉っぱ）の配置が再編成されて、「高齢者」イメージが転換されており、そのことで高齢者自身も「自己の生き方への自信を再構築

している」（川床 2014: 71）と指摘する。このように、いろいろ事業は地域活性化に成功した地域のブランディング・イメージを創りあげている。

上勝町のもう一つの地域ブランド化が、ゼロウェイスト運動である。生ゴミや家庭ごみの野焼きによる処理が問題視されたことが発端となり、1990 年代から住民が主体となって、できるだけ「ゴミを出さないような生産と消費のシステム」（石川 2015: 6）を創りあげた。町は、2003 年に「ゼロ・ウェイスト宣言」を可決し、2005 年に NPO 法人「ゼロ・ウェイストアカデミー」を設立している。2019 年現在、生ゴミは各家庭のコンポスト等で堆肥化され、家庭ごみは上勝町内のゴミステーションにおいて 34 種類に分別されている。町内で出るゴミの 8 割がリサイクルされるという²⁾。

ゼロ・ウェイスト運動を中心とする環境保全の試みも、I ターン者の移住促進に影響を与えている。たとえば、2015 年に上勝町に開業したビール醸造所は、エコ活動に共鳴して上勝町に開設された。醸造所や販売所など建物はすべてゴミをリサイクルして建てられ、ビジネスにおいてもゼロ・ウェイストを実践している。

3.3 上勝町における I ターン移住の促進と移住者支援

上勝町役場のウェブサイトによると、現在上勝町では「上勝町美しい集落再生プラン支援事業・上勝町人材育成事業補助制度」として、「住居」「就労」「子育て」の 3 点に関して支援を行っている。住居支援としては、上勝町内に移住を希望する人が空き家を購入・改修・清掃したり、新築したりする際の補助金を町が補助している。就労支援はいろいろ事業や柑橘類生産を中心に、苗木の購入費用や新規事業参入の経済的支援を行っている。子育て支援は、小中学生の子どもを持つ家庭が上勝町に移住した際、子どもの転入支援のための一時金を補助している³⁾。また、先述の株式会社いろいろは、2010 年から 2016 年度までイン

ターンシップ事業を実施し、2018 年以降は農業研修を実施して、町外からの交流人口の増加につとめており、ひいては移住者・定住者を増やすことを目指している。

上勝町が実施する「住居」「就労」「子育て」支援や、民間主体のインターンシップ・研修事業、企業支援など、上勝町で実施されている移住者促進の施策は、上勝町の地域ブランディング・イメージを確立し、上述のように年間平均 47 人（2013 年から 2018 年）の移住者を生み出している⁴⁾。

ただし、上勝町におけるこれらの移住者支援制度が、どの程度機能しているかという点については、検討を要する。上勝町に移住した人々のうち、定着する人は約 3 割とも言われており、7 割が移住後町外に流出している。もちろん、移住者の人生設計は必ずしもいずこかへの定着・定住を志しているとは限らず、移住を定着・定住の視点からのみ検討することは控えるべきであろう。ただ一方で、I ターン移住者の定着・定住率が必ずしも高くないことについては、上勝町の地元民・移住者の間においても、意識されている。

たとえば、上勝町で農業に従事する LT さんは、上勝町が I ターン移住者を大人数受け入れているにもかかわらず、その後の対応が十分でないことを次のように語っている。

役場はね、もう呼ぶだけ。……町もわかつとんよ。あの、しいたけハウスがあっちもこっちもできたでしょ。うちもやってた。でも、その、おいしい話で呼び込むだけ。そんでもう、あともう夜逃げ同然で帰った人が何人もある。……関西から来てた人なんかね、引越し費用、帰る費用もないから、引越しして帰る費用もないから、夜逃げ同然で帰って。そんな人がいっぱい。

I ターン移住者促進のプログラムが用意され、いどり事業やゼロ・ウェイスト事業を呼び水と

して多くの若者を引き寄せている上勝町にあっても、移住後の生活基盤を十全に確保することには必ずしも成功していない。それは、一方には移住後の就労機会が十分に用意できないことに一義的な要因があるものの、他方で移住者が地元のコミュニティとの間で適切な関係性やつながりを築き得ていないことにも原因の一部がある。

3.4 上勝町の集落と共同体組織

本節の最後に、上勝町の集落と地域の共同体組織を簡単に見ておきたい。上勝町は、今日の行政区分としては、正木、^{ほうじ}傍示、^{いくみ}福原、生実、旭の五つの大字から構成されている。大字はさらに複数の字によって構成される。一方上勝町には、「地区」と呼ばれる地域単位も存在する。この「地区」区分で言うと、上勝町は、八重地、^{いっちょ}市宇、野尻、^{たんの}田野々、福川、柳谷、福原、藤川、傍示、瀬津、檜原などの地区から成り立っている。この地区区分は、住所や地図情報としては使われてはいないものの、しばしば上勝町民の口には上がるし、広報誌などでも用いられている。

「地区」の一部は今日の行政単位である大字に重なる。しかし、多くの場合、大字は複数の地区から成り立っている。大字傍示と大字福原は、それぞれ傍示地区、福原地区に対応する。一方、今日の行政単位である大字正木には藤川地区と福川地区、柳谷地区などが、大字生実には野尻地区、瀬津地区、檜原地区などが、大字旭には八重地区、市宇地区、田野々地区などがそれぞれ含まれる。

現在「地区」と呼ばれる地域単位は、基本的には「^{ミヤウ}名」⁵⁾ と呼ばれる共同体組織に対応している。「名」とは、神社を中心とした信仰・祭祀共同体であり、神社の祭祀を担う氏子集団である。実際、現在「地区」と呼ばれる地域単位の多くには、それぞれ神社が 1 社ずつ存在する。例えば、大字旭を構成する八重地、市宇、田野々各地区には、八重地八幡神社、市宇八幡神社、田野々神明神社^{ミヤウ}があり、それぞれの神社は八重地名、市宇名、田

42 農山村地域における I ターン移住と地域社会との接合について

野々名^{ミヨウ}の氏子が年中行事や神社の改修などに対して責任を持つ。ただし、今日の名組織^{ミヨウ}の存在意義は、信仰・祭祀役割に加えて、消防団や青年会、地区内の清掃主体などとも連関している。後述のように、この信仰共同体である「名」は、今日においても上勝町の重要な役割を担った共同体組織であり、Iターン移住者と地元住民との接合を考える上で欠かすことのできない要素の一つとなる。

こうした上勝町における地域ブランド性、Iターン移住促進事業、地域信仰共同体を踏まえたうえで、次節では、上勝町へのIターン移住者が、上勝町の地元社会とどのような社会関係を築こうとしているのかについて、聞き取り調査にもとづき明らかにしたい。

4. 上勝町におけるIターン者と地元地域との社会関係

本論が分析するIターン移住者への聞き取り調査は、2019年9月13日から17日にかけて徳島県上勝町で実施した。聞き取り調査への協力を依頼したIターン移住者は、合計8名である。調査協力者の概要と経歴を整理すると、表1のようになる。

4.1 移住の経緯と契機

まずは、8人の調査協力者について、彼らの移住の経緯ときっかけを紹介してみよう。Iターン

移住者による移住の経緯やきっかけは、類別化やカテゴリ化を許さないほど多様である。有機農業への関心や地域活性化への貢献意欲などが根底にある人もいるものの、偶然のきっかけとしか言いようのない移住者も少なくない。上記8人の調査協力者のうち7人は、2010年代以降に上勝町に移住している。唯一INさんのみが、1990年代初頭に移住しており、移住の契機の点で他のIターン移住者とは異なる。まずINさんの移住経緯をみてみよう。

1992年に29歳で上勝町に移住したINさんは、菅の提示したIターン移住者のパターン（菅1998: 163）にもとづくと、「オルタナティブ・カルチャリスト」の典型である。INさんは大学時代、イスラエルのキブツやネパール、チベット等を旅し、そうした地域での生活に憧れていた。旅先で知り合った人で、先に上勝町に移住していた女性を頼って上勝町を訪れた。INさんは、その時のことを次のように回想している。「山の険しいところにへばりつくように家があたりとか、そういう印象に近いようなもので、こんなところが日本にもあったんだというかね、こんなとこに住んでみたいなのというのは、最初に来たときやっぱり思ったのかな。」INさんが上勝町に移住した当時は、Iターン移住者などほとんどおらず、「僕らが来たときには、都会から何しに来たのって感じですよね。何でこんな不便なとこに、何しに来たの」というイメージで地元社会から認識されてい

表 1 調査対象者の属性等

氏名	年齢	性別	移住時期	現職
IYさん	23	M	2018	いろどりビジネスを中心に、その他農家の手伝い、店舗の手伝いなど
NYさん	63	M	2014	食堂経営および飲食ビジネス、商品開発など
IDさん	34	M	2013	阿波晩茶の生産および販売、いろどりビジネス
NTさん	36	M	2018	地域おこし協力隊、理学療法士
BNさん	35	F	2016	トマト農家
OKさん	52	M	2012	上勝町のプロモーション映像製作、グランピング場経営、バー経営
INさん	57	M	1992	マッサージ治療院経営
PTさん	32	M	2014	イタリア料理店経営

た。

2010年代以降に上勝町に移住した7人のIターン者の移住契機は、多様性があるものの多かれ少なかれ、いそろり事業やゼロ・ウェイスト、地域の活性化への取組みと関係している。まず、IYさんとIDさんは、いそろり事業の研修を契機に、上勝町に移住した。IYさんは、2018年7月に、株式会社いそろりが実施している3日間の上勝農業研修のために上勝を訪れ、そのまま上勝町に残っている。IDさんは、もともと母親がいそろり事業に参加するために上勝に移住しており、その母親を追うかたちで、上勝町が実施していた「新規就農者育成プログラム」に参加するために来町し、いそろり事業をはじめいくつかの職を経て、現在は阿波晩茶⁶⁾の生産・販売を行う会社を立ち上げている。

NTさんは、地域おこし協力隊⁷⁾として上勝町に赴任し、理学療法士として町内の公民館などで無料の鍼灸按摩治療を行っている。当初は、上勝町が徳島県からの委託を受け、歯磨き粉などの日用品を生産する企業とタイアップして実施するヘルスツーリズムのプログラム策定に協力するために赴任した。その後、様々な事情でヘルスツーリズムのプログラム策定の事業からは退いたものの、上勝町にある「古きよき日本」のような人びとのつながりに感銘を受け、家族4人で上勝町に移住することになった。IDさんも、阿波晩茶の生産・販売する会社を起こす前は、地域おこし協力隊として、上勝町内で勤務していた。

有機農業や地産地消などのイメージを抱いて上勝町に移住した人もいる。有機トマトを生産するBNさんも、自分の上勝町移住を「偶然」と語る。大阪の高校を卒業してニューヨークの大学に留学し、卒業後ニューヨークで働いていたBNさんは、2001年の911同時多発テロを経験する。911以降、ニューヨークの町全体が沈うつな表情になり、活気を失っていった状況を目の当たりにしたBNさんは、日本に戻りいくつかの仕事を経験した後、もともと関心があった有機農業に従事するため、

上勝町を選んだ。PTさんは徳島市内に生まれ、東京で3年間のイタリア料理修行、兵庫県淡路島で2年間のレストラン経営を経て、2014年に独立して上勝町にイタリア料理店を開いた。地産地消型のレストラン経営を志しており、徳島県内で店舗を探していたときに、たまたま上勝町の古民家を紹介され、そこに店を出すことを決めた。

OKさんが上勝町に移住することになるきっかけも、ある種の偶然である。神戸に生まれ、東京でテレビのディレクターをしていたOKさんは、上勝町のゼロ・ウェイスト運動の取材を、制作会社のプロデューサーから依頼され、2009年にはじめて上勝町を訪れた。その後2012年に、NHKのドキュメンタリー映像製作のために半年間上勝町に滞在し、そのまま上勝町に家を借りて移住している。現在は東京の映像製作会社を退職し、上勝町で会社を立ち上げた。

徳島県内で料亭を経営していたNYさんは、60歳を過ぎて息子に料亭の事業をゆずり、自分は上勝町に家を購入して移住した。「自分の人生はこれからだ。今こそが人生の本番だ」と考え、「一人で商品開発を、自分で思ったようにやってみたかった」という思いを実現するために、上勝町で町内の産物を利用した製品を開発している。

4.2 地域ブランディング・イメージとIターン移住者

このように上勝町にIターン移住した契機は、単純な類型化を拒むほどに多様である。このように多様な移住の契機は、上勝町が創りあげてきた地域のブランディング・イメージとどのようにつながっているのか。地域のブランド化が若者のIターン移住を促進するという指摘(石川 2015)や『『人が人を呼ぶ』好循環』(小田切・尾原 2018: 97)を踏まえ、上勝町へのIターン移住者が上勝の地域ブランドをどのように認識し、それに参与・関係しているのかを見てみたい。その際、いそろり事業とゼロ・ウェイスト運動の2点に関するIターン移住者の語りを抽出する。

44 農山村地域における I ターン移住と地域社会との接合について

まず、いゝろどり事業について見てみよう。先述のように、いゝろどり事業は上勝町が推進するもっとも有力な産業であり、毎年多くの町外者が株式会社いゝろどりの実施するインターンや農業研修に参加している。前節で見たように、上記 8 人の調査協力者においても、2 人がいゝろどり事業への参入を目的に上勝町に移住している。そのうち ID さんは、いゝろどりとのかかわりを次のように語っている。

なんで〔上勝町に〕来たん言ったら、こう、なんとなくっていう話になってしまうんですけど。まっ、母親がおって、まあいゝろどりの仕事やっとして、で、あの一、結構ぼく、あんまり言うたらあかんんですけど、いゝろどり、これどうなん、みたいなんがあって。なんて言うんですかね、元気なおじいちゃんやおばあちゃんが仕事してはるん見て、あ、すごいなあと思う反面、その時は、若い人、ほんまおらんかったんですよ。ほんで、……次やる人っていうのが全然その、育ってないような状態やったので、こんなん言うても 5 年くらいで終わるんちゃうん、いうぐらの感触やったんですけど、ほんで、それからまあ、で、2 年ぐらいたしたときに、いゝろどりの会社の人、その、新規就農者の育成プログラムってのを、会社でやりたいんやっていう話をされて、モデルで来てくれへんっていうので、お誘いを受けて、それやったら僕も、それ絶対必要やと思ってたことやったんで、それやったら、母親もおるし、まあやってもええかないうんで。

先述のように、ID さんは母親がいゝろどり事業に参入するために、先に上勝町に移住していた。いゝろどりの業っぱビジネスを通して、過疎村落の高齢者が活躍する姿には感銘を受けたものの、このビジネスが次世代を担う若者の再生産にはつながっていないことを実感していた。そのため、い

ろどり事業が新規就農者を育成する試みを始めるに当たって、積極的に参加している。上勝町のブランディング・イメージを引き受けると同時に、ブランディング・イメージを広げることに加わったと言える。ただし、この時の新規就農者育成プログラムは、予算の関係で実際には実施されず、ID さんはいゝろどり事業ではなく、阿波晩茶事業にシフトした。

次に、ゼロ・ウェイストについて見てみよう。先述の移住の契機で紹介したように、OK さんは元来、ゼロ・ウェイスト運動の取材ではじめて上勝町を訪れており、ゼロ・ウェイストが I ターン移住者を呼び込む町のブランドとして機能していることが分かる。他方で、ブランディング・イメージとしてのゼロ・ウェイストが、I ターン移住者の事業運営にマイナスの影響を与えている部分もある。PT さんが、ゼロ・ウェイスト運動について語ったくだりを紹介したい。

とくに飲食店ではちょっとね、……生ゴミ処理が一番難しいかなというところですよ。自家処理なんですよ、コンポストで。一応大きな生ゴミ処理機みたいなんがあるんですけど、組合に入らなあかんかったりとか、そういう組合ってのがあるんですけど、事業者さんがはいってるようなやつ、各事業者さんが入ってるところに行って、そこに行ったら生ゴミも捨てれるんですけど、まあねえ、組合に入らなあかんていう選択肢も、ちょっとどうなんという感じなんで、入ってはないですけど。今は自分で、埋めたり、鶏にあげたりする分もあれば、もうあの一、家が小松島⁸⁾なんで、小松島のゴミ袋に入れて捨てるなんてこともたまにあります、現実的なところ言おうと。非常に大変な、困ってる場所ですわ。まあ、ゼロ・ウェイストアカデミーにもそういう話はね、したりするんですけど。何とか改善点を見つけてほしいというか。

PTさんも、ゼロ・ウェイスト運動そのものについては、批判的ではない。プラスチックゴミや資源ゴミの回収については、ゼロ・ウェイスト運動が進めるゴミ産出量削減の試みに賛同している。上勝町の景観や地産地消による食材の調達にこだわっていたPTさんにとっては、ゼロ・ウェイストの運動は上勝町を選んだ重要な要素でもあろう。他方で、そうしたゴミ産出量を削減する試みも、事業形態によって柔軟に対応してほしいと述べる。レストランを経営しているため、毎日大量に生まれる生ゴミは自家処理に追いつかず、他市町村で処理せざるを得ないこともある。ブランド化された上勝町の試みが、Iターン移住者の事業運営の拡大にブレーキをかけている側面があることも否定できない。

4.3 Iターン移住者支援制度と移住者

次に、行政が実施する移住者支援制度とIターン移住者との結びつきを考えたい。国や県、それに上勝町が実施しているIターン移住者促進制度については、多くの移住者が何らかのかたちで利用している。

まず、2018年にいづれ事業に参入するために上勝町に移住したIYさんである。IYさんはいづれ事業を確実に進めるため、2019年2月に農地つきの古民家を購入した。その際、上勝町のIターン移住者促進制度を利用し、家屋購入費用の一部として町から100万円を補助されている。また、町のブランディング・イメージであるいづれ事業については、新規就農者がいづれ採用の苗木を購入するに際して、町からの補助がある。さらに、いづれ事業においては、自分の植えた木々の葉を採集するのに、苗木を植えてから3年から5年の時間を要するため、町はその間の生活の補助を供給している。

一方、自分で起業して会社を経営しているOKさんとPTさんは、上勝町が提供している「雇用推進事業」の補助金を受けている。上勝町の雇用推進事業補助金とは、事業主が社員を雇う場合、

給与の半額もしくは年間120万円を補助されるものである。OKさん、PTさんともに、Iターン移住者を含め社員を数名雇用しており、社員の給与の一部をこの補助金でまかなっている。OKさんは「(雇用推進事業補助金は) まだもらわないとやってけないな」と述べており、同補助金はIターン移住者と上勝町をつなげる重要な制度となっている。

他方で、町内でレストランを経営するPTさんは、次のようにも述べている。

〔補助金などは〕ありすぎても、自分でここでしっかり生活していくということが大事ですから、まあ場所があって、後は家賃とかはもう自分でがんばって払う。そういうの〔過剰な補助金〕はないほうがいいと思いますけどね。まあ、それ以外でなんかいろいろバックアップしてくれるところだとか、たとえばまあ人材の斡旋だったりとか、〔町は〕そういうのをしてくれたほうが助かりますね、こっちは。観光産業に力を入れるとか。

もともとビジネスを展開するために上勝町に来たPTさんは、補助金に頼ることを当初から期待するということは経営者として失格であると述べる。PTさんにとって仕事とは、地域の活性化より以前にまず自分のビジネスを推進することであり、「仕事もないのにこんな田舎に移住してくることが理解できない」とも言う。補助金制度に依拠して自分の生活を自分で維持できないような地域活性化の現状には批判的である。

4.4 地元の人びととのつながり、地元共同体への参入

次に、先述の地元共同体との関係という点を考察してみよう。地元共同体とのつながりについても、いくつかの側面がある。本節では、(1) 日常生活におけるご近所付き合いとしてのつながり、(2) 地元共同体組織とのつながりの2点から、地

元共同体と I ターン移住者との関係を探ってみた。
い。

(1) 日常生活におけるつながり

もちろん日常的には、地元住民とのつながりは維持されている。それは近所付き合いとしてのもののやり取りや、飲み会などの日常的なコミュニケーションなどである。こうした日常生活における密なつながりが、農山村地域に特徴的に見られることについては、高木も議論しており、それが I ターン移住者と地元住民との間のずれや齟齬を生み出していることを指摘している（高木 2000）。

上勝町内での人びとのつながりについて INさんは、食料をはじめとしたもののやりとりが、生活のなかで日常的に行われていることを語っている。INさんは、こうしたもののやり取りを「お金以外で動いているものがある」⁹⁾と表現している。

結構もらい物が多いんですよ。お米なんてほとんど買ったこともないんですよ。お米はもらえるし。ビールとかね。お金以外で動いているものがある。野菜とか、魚とか、魚くれる人もいるし。食べ物はあるし買わなくてもいい。食費はほとんどかからないですね。あまったものが回ってるみたいなものもあるんです。結構大きいですよ、その収入も。だからあんまりお金は要らないですね、上勝にいます。

INさんが語るように、上勝町における日常生活規範は、ある種の協働により成立しており、そうした協働に参入することで、町内での生活が維持できるようになる。

「お金以外で動いている」という点については、OKさんも似たようなことを述べている。筆者が山奥の古民家にある OKさんの事務所において、OKさんを取り巻く日常のつながりについて尋ねた際、ちょうど古民家の周りで草刈をしていた人

を例に挙げて次のように語っている。

なんて言うんでしょうね。まあ、ぼくはもう、地元の人にすごく助けられて、非常にめぐまれた状態で今までやってきたと思います。で、そんな表だって助けてくれるってことではないんだけど、いまで草刈ってるのもうちの常連のおっちゃん、でさっき、今日の仕事が昼で終わったって、なんか、ぶらっとやってきたから、じゃちょっと草刈ってって言った、分かったってって、草刈ってくれてるんだけど。まあだから、なんていうんでしょうね。そんなに、ありがたいことに、最近あんまり特別視はされなくなってきたのかなって気はしますね。だから、逆にこっちもできることはがんばってやって、お返しじゃないですけど。ただうちらができることって、農作業だったり、木切ったりができるわけじゃないんで、みんなにちょっと楽しいことを提供するってことなんだろうとは思うんで、楽しい場所、時間を提供することだと思ってるんで、まあそういうことでお返ししていく、って感じかな。

「お金以外で動いている」ものについて OKさんが語るは、食料ではない。むしろ、感情や行いの交換などの協働のあり方である。

また、語りのなかにある「楽しい場所、時間」とは、OKさんが経営するバーを指している。OKさんの次の語りを見てみよう。

やっぱりでも、飲めるところがないから。どうなんだろう。あと、いろんな人が集まるんで、なんだろう、最初にバーやったのも、バーって、えっと、基本一人で行く場所だと僕思ってた、居酒屋とかだとグループで行って、グループで話をするじゃないですか。ただバーって言うのは一人に来て、カウンターでたまたま横になって、で、もしかしたらち

らっとなんか話ができたりする、っていうような場所だと思ってるんで、まあ、知らない人と出会う、いつも話したことない人と話ができるというようなところがいいところかなとおもっていて、まあそういうこともあるかもしれない。だから意外と町内でも、地区が違うとあんまりしゃべらない、飲む機会がないですよ。そういう人たちがばらっと来て、いろんな地区の人が普通に飲めるとかっていうのも。

OKさんのバーを訪れる常連客の多くは、Iターン移住者ではなく、むしろ地元の人が多い。上記の語りで草刈をしていた男性も、このバーの常連客の地元住民である。バーの経営を通して、Iターン移住者と地元住民の間のみならず、普段はあまり触れ合うことのない地元住民同士をつなげることが、「お金以外で動いている」上勝町を維持することにつながる。

ところで、上勝町のブランディング・イメージにたよって近年都市から来町した若者のなかには、「お金以外で動く」こうした協働の仕組みにすぐに対応できないものも多い。NYさんは、そうした地元の協働の仕組みに参加できないIターン移住者の若者を自分で世話している。NYさんは、首都圏から移住したとある若者を例に挙げて、地元住民と「お金以外で動く」コミュニケーションの仕組みを知ることの重要性を語っている。

〔移住を成功させる秘訣は〕コミュニケーションを地元の人とする〔ことである〕。ほんで、私は全部ね、連れて行きました。あの一、家に。あの一、こんなこと私は役場に頼まれてません。役場からお金ももらってません、一銭も。ほやけど、彼に、あの一、お土産を送ってもらって、こんなん送ってきたでしょ？ ピーナツの、うん。あれも私が言ったんです。あれが一番おいしいけん、あれを送ってもらえと。ほで、軒数も数えて、

ほで、何ぼ送ってもらえと言うて送ってもらたんです。ほんで、私が全部、あの一、工事しよったときおったかな、あそこにも連れて行って、みんなを紹介して。

NYさんは、首都圏から身一つで上勝町に移住した若者を地元の協働のネットワークに引き込むため、移住者の地元の特産であるピーナツのお菓子を地区の軒数分取り寄せさせ、彼と一緒に地区内を一軒一軒回って協働のきっかけを作り出した。

(2) 地元共同体組織とのつながり

こうした協働活動の空間は、日常の食事のやり取りや感情・行いの交換にとどまるものではない。むしろ地元の共同体組織への参加が期待される場合もある。

1992年に上勝町に移住したINさんは、同町においても古参のIターン移住者である。INさんは現在、上勝町の中心部にある県営住宅に居住している。その県営住宅の入居に際して、INさんは上勝町から「名」の活動に参加することが求められたという。

まあ、町のほうのあれでは、自治会とか、自治会というか、この「名」組織って言うんですけど、そういうのには参加してください言われていますけどね。……具体的な名の活動ってのは、そうですね、まず敬老会ってのがあるんですけど、春に。でも敬老会に実際参加するのは、協議員というのになったときですけどね。……それと、後はね、やっぱり神社の、名ってのは神社の氏子連でもあるんですよ。でまあ、宗教の違う人はそれには加わらなくてもいいんですけど、あの一、氏子の祭りが、こっち〔福原地区〕に王子神社っていう神社があって、……その祭りの運営で、まあ、福原名の場合だと思うんですけど、他の名のことは知らないですけど、福原名の場合は、その、当屋、当屋って分かりますかね。

当屋神主とも、たぶん地域によっては言うと思うんですけど。まあ、神社で実際神事を行うときに、その神事自体に参加する人たちを当屋って言いますね。当屋神主っていう、神主のようなものになるんですよ。その当屋組に入って、当屋をしてる、普通の、まあ移住者は入ってませんけどたぶん、名の人たちはそういう役割も回ってくるんですけど。そういう人たちがみこしを担いだりするんですけど。

IN さんによれば、I ターン移住者の多くは、名組織には加入しておらず、氏子中心の当屋を勤めることはほぼない。他方で名を単位とした活動には、消防団の活動や県道の草刈などがあり、こうした神事以外の活動には、I ターン移住者も参加することが期待される。あるいは、お囃子などとして名単位で行われるだんじり祭に参加することもあるものの、神事祭祀の中核に参加することはない。IN さんは、県営住宅への入居に際して、福原名に加入した。名の活動の中心には、氏子を中心とした神事祭祀の遂行があり、名に正式に参加するということは、その神事祭祀の一翼を担うことと同義である。IN さんは、消防団や県道の清掃という日常の協働活動を越えて地元共同体「名」の一員となり、評議員や当屋神主として活躍することを選んだ。

逆に、地域の地元共同体と一定以上のつながりを持たないようにしている人もいる。PT さんもその一人だ。そもそもレストランビジネスを展開するために上勝町を選んだ PT さんは、地元共同体の活動とは一定の距離を置いている。

そんなに、なんていうんでしょうね。この場合は温泉街なんで、そこまではないでしょうけど。もうちょっと奥行って、たとえば農業だけするっていうんだったらやっぱり入ったほうがいいと思いますけどね。正直言ったら、それ、何で仕事もないのにこんな

ところ移住してくるんっていう、僕からするとそうなんです、実際移住者の人たちって。仕事ないでしょ？ ないのに家見つけて、なんか農業したいみたいなこと言う訳じゃないですか。だったら、そういう地域のことを、まあちょっと一翼担ってやるしかないと思うんですよ。でも僕らはそれ以外の方法で町に貢献することを考えているので、別に入らなくても、ちょっと僕はできないけど、それ以外のことでがんばってますっていう。

地元の共同体組織に参加することは、自分だけで生活基盤を築けない I ターン移住者にとっては必要かもしれないといつつ、仕事をするために上勝町に来ている PT さんは、必要最低限以上にこうした共同体組織に参加することはないと宣言する。PT さんにとって地域の活性化とは、町の就労機会を増やし、町外からレストランを訪れる人を増やすことであり、必ずしも地元の協働活動に積極的に参加し、町が本来有していた地縁的なつながりを維持することではない。

5. おわりに

以上、上勝町に居住している I ターン移住者の語りを紹介するかたちで、移住者が上勝町のブランディング・イメージ、I ターン促進制度、地元共同体とどのように折り合いをつけ、関係性を築いているのかについて整理した。こうした語りから看取できるのは、従来の研究や報道が作り出してきたような、パッケージ化された成功モデルではなく、ブランド化や制度、地元共同体との間で格闘する、多様な経験を有した I ターン移住者の生のあり方ではなかろうか。最後に本節では、ブランド化、制度、地元共同体の 3 点の視角から語りの事例をまとめなおすとともに、今後の研究の方向性を示したい。

まず、確立されたブランディング・イメージが、I ターン移住者を上勝町に引き寄せていることは

確かである。本調査の調査協力者のなかで、いどりの葉っぱビジネスに従事することをめざして上勝町に移住したのは2人だけであるものの、実際には数多くの若者が葉っぱビジネスに従事することを目的に、上勝町を訪れている。また、ゼロ・ウェイスト運動も、活動の理念に共感する人々を上勝町に引き寄せ、映像取材をはじめ、ゼロ・ウェイストの理念を体現した工場の誘致や、インターンの受入なども行っている。

ただし、Iターン移住者が、こうしたブランディング・イメージに憧れて上勝町来到と、イメージと現実とのあいだでうまく折り合いが付けられないものも少なくない。たとえばいどりの葉っぱビジネスについて述べると、いどり事業で生活するためには、まず自分の農地を獲得し、そこにつまものとして使われる木々を植え、商品になる葉ができるのを待たねばならない。それには3年から5年の年月がかかる。ブランディング・イメージが作り出す華やかさと現実の生活との間でうまく折り合いが付けられない場合、Iターン移住者は、上勝町を去ることになる。

Iターン移住者が、上勝町において生活するための経済基盤を確立するためには、国や県、町など行政上の経済的補助を受けなければならないのが現状である。とくに町のブランディング・イメージであるいどり事業に関しては、サポートが豊富であり、Iターン移住者と町とは相互依存的な関係となる。

ただし、こうした経済的・行政的サポートのみでは、Iターン移住者は上勝町に残り続けることは難しい。Iターン移住者は、地元共同体組織や日常のコミュニケーションへの参入をとおして、「お金以外で動く」町のシステムの一部となることで、上勝町のなかで居場所を確立する。退職後上勝町にIターン移住したNYさんが、若い移住者を連れて、地区全体にあいさつ回りにでかけたのも、地元共同体組織や日常のコミュニケーションへの参加が、上勝町で生き抜くために不可欠であると認識しているからである。こうした共同体

組織や日常的なコミュニケーションをとおして行われる活動を、金子は「協働活動」と呼んでいる(金子 2006: 93)。

他方、Iターン移住者にとって、地元共同体との関係は両義的でもある。PTさんが、「[自分は、地元共同体への日常的な参入] 以外のことでがんばってます」と言うとき、地域の活性化へ貢献することと、地元共同体との間で一定の距離をとることとの微妙な緊張関係を見ることができる。高木は、Iターン移住者と地元住民との間には「異化」と「同化」のプロセスがあるという。このプロセスは「過去から守り続けられてきた共同性に関する、同化と対立の張りつめた相互作用の過程」であり、また「過去に縛られることなく、[Iターン移住者と地元住民の] 両者が共に生きる中で共同と差異を積極的に活用する、ふれあいと刺激の相互作用の過程」(高木 2000: 16) でもある。

地域の活性化について十全に理解するためには、Iターン移住者の経験や格闘をパッケージ化されたマスターナラティブに回収することなく、多様な生のまま民族誌的に描き出すことにあるのではないだろうか。本稿は、短期間の聞き取り調査にもとづく萌芽的整理にすぎない。Iターン移住者の生活の現場に寄り添いながら、Iターン移住者が地域ブランドや地元共同体、行政との間で経験し格闘する際のアンビバレントな感情を分析の組上に上げる必要があろう。

注

- 1) 上勝町でのインタビュー調査によると、移住者のうち町に定着する人は全体の3割程度である。
- 2) 詳細はゼロ・ウェイストアカデミーのウェブサイト (<http://zwa.jp/>) を参照されたい。
- 3) 実際の補助金の支出は、年齢による制限や、条件による支給金額の差がある。詳細は上勝町のウェブサイト (<http://www.kamikatsu.jp/docs/2011021600115/>) を参照されたい。
- 4) こうした地域ブランドの確立が移住者の認知をどのように促進しているのかについては、石川 (2015) が、移住者への聞き取り調査をもとに明ら

50 農山村地域における I ターン移住と地域社会との接合について

かにしている。

- 5) 「名(ミヨウ)」は、西日本一帯に歴史的にみられる信仰共同体であり、地域ごとに多少の差がある。たとえば広島県三原市の「名」組織は、「一定数の土地と家々によって構成される社会的単位であり、…基本的に水系の源である溜池を所有する家を中心に、同じ水系の土地を持つ 10 戸程度の家々で構成される」(上野 2011: 44)。西日本における宮座や名については、上野和男(2011)、崔杉昌(2011)等を参照されたい。
- 6) 阿波晩茶とは、乳酸菌製法で作られる発酵茶の一種であり、徳島県の一部地方のみで生産されている。上勝町ではこれまで、自生の茶葉を用いて、自家消費としてのみ作られていた。詳細は Kamikatsu Tea Mate のウェブサイト (<https://www.kamikatsu-teamate.com/>) などを参照されたい。
- 7) 総務省が推進する地域活性化事業の一つ。都市地域から過疎地域等の条件不利地域に住民票を移して生活の拠点を移した人を、地方公共団体が「地域おこし協力隊員」として委嘱し、一定期間地域に居住して、地域ブランドや地場産品の開発・販売・PR等の地域おこしの支援や、農林水産業への従事、住民の生活支援などを行う。
- 8) 上勝町がある勝浦郡に隣接する市。PTさんの両親は、徳島市内を離れ、小松島市内に移住した。
- 9) この点は、人類学的には「贈与論」の文脈で考察することが望まれる。稿を改めて議論したい。

参考文献

- 石川葉央, 2015, 「徳島県上勝町における地域ブランドの確立と移住者による認知」『広島大学総合博物館研究報告』7, 1-14.
- 今井裕章他, 2011, 「徳島県上勝町における地域活性化の取り組みについて」『地域創生研究年報』第6号, 61-77.
- 上野和男, 2011, 「宮座研究の歴史と現在——概念・当屋制・変化」『国立歴史民俗博物館研究報告』161,

39-60.

- 小田切徳美・尾原浩子, 2018, 『農山村からの地方創生』筑波書房.
- 金子勇, 2016, 『「地方創生と消滅」の社会学——日本のコミュニティのゆくえ』ミネルヴァ書房.
- 川床靖子, 2013, 『空間のエスノグラフィー——文化を横断する』春風社.
- 川床靖子, 2014, 「「生きがい」はいかにしてつくられるのか——共同体の内と外との関係の再編」『大東文化大学紀要〈社会科学編〉』第52号, 69-82.
- 菅康弘, 1998, 「交わることで混じること——地域活性化と移り住む者」間場寿一編『地方文化の社会学』世界思想社, 150-175.
- 高木学, 2000, 「「離都向村」の社会学——I ターンに見る過疎地域と都市の相互作用」『ソシオロジ』44(3), 3-20.
- 崔杉昌, 2011, 「岡山県における宮座の変質と展開——新見市高瀬の事例を中心に」『国立歴史民俗博物館研究報告』161, 263-293.
- 松宮朝, 2017, 「I ターン移住者, 集落支援員による「協働」型集落活動——京都府綾部市の事例から」『村落社会研究』53, 143-173.
- 松宮朝, 2017, 「集落支援員とI ターン移住者の集落活動」『社会福祉研究』19, 51-57.
- 藻谷浩介・NHK 広島取材班, 2013, 『里山資本主義——日本経済は「安心の原理」で動く』角川書店.
- 濱田恵三・伊藤浩平・神戸一生編著, 2018, 『地域創生の戦略と実践』晃洋書房.

ウェブサイト

- Kamikatsu Tea Mate <https://www.kamikatsu-teamate.com/>
- 上勝町 <http://www.kamikatsu.jp/docs/2011021600115/>
- 上勝町役場移住交流支援センター <https://kamipara.jp/>
- ゼロ・ウェイストア카데미 <http://zwa.jp/>